

第 68 回日本小児保健協会学術集会 若手シンポジウム 2

性教育の多様性—ミライはどうなっている?—

中井 靖 (京都女子大学発達教育学部)

I. はじめに

1. 若手による小児保健検討委員会

日本小児保健協会における委員会事業の一環として、2019 年度に若手による小児保健検討会準備委員会は設立され、2020 年度より若手による小児保健検討委員会に名称を改めた。本委員会の目的は 10~20 年後の未来を見越して、今から小児保健に関する課題解決に向けて取り組むことを通じ、小児保健領域全体の向上および啓発を推進することである。本委員会では若手だからこそその発想を基にして、小児保健領域の特徴である多職種連携に着目し、これを活性する仕組みを構築することを目指す。2021 年度は担当理事 2 名、委員 27 名の計 29 名で構成された。

2. グループによる取り組み

2020 年度から 2021 年度にかけては 4 グループに分かれ、それぞれが 10~20 年後の未来を見越した小児保健に関する課題解決に向けて取り組んだ。グループ 1 は「生涯を通じた予防健診チーム (リーダー: 中山祐一・摂南大学看護学部)」, グループ 2 は「ICT チーム (リーダー: 森藤 香奈子・長崎大学生命医科学域保健学系)」, グループ 3 は「家族支援チーム (リーダー: 浅利 剛史・札幌医科大学保健医療学部)」, グループ 4 は「障害児の未来チーム (リーダー: 中井 靖・京都女子大学発達教育学部)」であった。

2020 年度に開催された第 67 回日本小児保健協会学術集会ではグループ 1 の「医療的ケア児の現状と課題—10 年後を見据えて—」が若手シンポジウムとし

て採択された。そして、2021 年度に開催された第 68 回同学術集会ではグループ 2 の「コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み」, グループ 4 の「性教育の多様性—ミライはどうなっている?—」(本稿)の 2 つが若手シンポジウムとして採択された。なお、2022 年度に開催される第 69 回同学術集会ではグループ 4 の「ミライに生きる子どもたちへの包括的性教育—セクシャルマイノリティの現状を踏まえて—」が予定されている。

II. シンポジウム

1. 企画

1) 企画者

グループ 4 のメンバーは中井 靖 (上述), 津田 聡子 (中部大学生命健康科学部), 小谷 裕美子 (徳島大学小児科), 松井 学洋 (関西学院大学教育学部), 阪下 和美 (東京都立松沢病院精神科), 森藤 香奈子 (上述), 田中 真衣 (白梅学園大学子ども学部), 浅利 剛史 (上述), 中山 祐一 (上述), 三牧 正和 (帝京大学医学部小児科・若手による小児保健検討委員会担当理事) の 10 名であった。

2) テーマ

「性教育の多様性—ミライはどうなっている?—」

3) 概要

わが国の教育現場に外国籍の子どもたちが急増する中、母国での教育や宗教的背景などを踏まえた性教育の多様性が求められる。また、ウェブや SNS から子どもたちが性に関する情報を容易に入手できる状況にあり、従来の「寝た子を起こす」のようにタブー視す

シンポジウムの流れ

時刻	時間	担当	内容
13時00分	5分	中井	シンポジウムの概要
13時05分	20分	Alexander先生	これからの「性」との向き合い方
13時25分	20分	津田先生	インドネシアの性に関する教育
13時45分	20分	桑江先生	沖縄県における思春期性教育の現状と課題
14時05分	20分	座長・シンポジスト	質疑応答
14時25分	5分	中井	まとめ

図1 タイムスケジュール

る性教育からの転換が急務といえる。そこで、本シンポジウムでは性教育の国際的指針である包括的性教育に立脚し、国内外の多様な視座から小児の性教育に関する話題提供を行った。そして、固定的な規範で捉えるのではなく、多様な文化を尊重して互いに歩み寄りながら、未来の性教育のあり方を考え続けることの大切さを検討した。

4) 座長

中井 靖（上述）

5) シンポジスト

Ronni Alexander（神戸大学大学院国際協力研究科）

津田 聡子（上述）

桑江 喜代子（一般社団法人沖縄県助産師会）

6) タイムスケジュール

全体を90分とし、各シンポジストによる話題提供と質疑応答を設けた（図1）。

2. 実際の内容

1) シンポジウムの概要（中井 靖）

本シンポジウムの流れおよび概要を説明した。また、本シンポジウム全体で使用される「セクシュアリティ」と「包括的性教育」の用語を説明した。

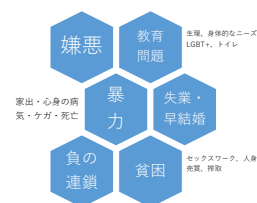
2) これからの「性」との向き合い方（Ronni Alexander）

平和学の視座から性教育を捉えると、性教育は国際的平和に貢献するものである。平和とはあらゆる形態の暴力がないことであり、共通の規範として根付くものである。そのためには教育を通じて常に維持・創造する必要があり、性教育もその一つである。ジェンダー等に関するマイノリティ性を表現しても不利や被害を受けないことでもある。

2016年に国連総会において平和への権利宣言は国

ジェンダーに対する不十分な理解は、グローバルヘルスを脅かす

- 世界の約3人に1人の女性は暴力を受けたことがある
- 暴力（DV）を受けた人は心の病気をしやすい
- 教育問題：偏見、設備の不備
→LGBTQ+は学校に行かない、卒業しない
- 失業、仕事が見つからない
- LGBTQI+の自殺率は高い
・特に10代・20代 40%～60%



2021.6.20

アレキサンダー

包括的な性教育がある明日

- 個人の権利
 - ・身体に関する諸決定ができる
 - ・「ノー」と言える、尊重される
- 個人の理解と尊重
 - ・多様なジェンダー・性、性的指向、性自認、性表現を理解する
 - ・自分の違う人も尊重する
- 個人の選択
 - ・新しい男らしさ、新しい考え方
 - ・差別、ヘイト、暴力に「ノー」
- 世界の安全と健康
 - ・ジェンダーに基づく暴力がない
 - ・すべての人の平和に生きる権利が擁護されている



2021.6.20

アレキサンダー

図2 Alexander先生のスライド（一部）

際宣言として採択され、平和に生きる権利が保障された。リプロダクティブヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康と権利）とは自分の性や生殖に関することを自分で決められて社会的にも認められることである。個人の性やジェンダーは社会、経済、グローバルヘルスにまで影響を及ぼす（図2）。

従来の性教育にも一定の効用はあるものの、固定的な内容であるため、現状の再生産といえる。変化する状況や多様化する価値観に伴い、性教育は常に維持・創造する必要がある。新たな包括的性教育は多様性の尊重の視点に立っているため、子どもたちに状況や価値観に合った内容に変えていくことのできるツールといえる。

性やジェンダーに関することは国際的外交に使用されることがある。例えば、1984年にアメリカが導入したメキシコシティ政策（通称：グローバル・ギャグ・ルール、略称：GGR）がある。これはアメリカが資金援助するアメリカ以外の国のNGO等の組織・団体に対して、人工妊娠中絶に関する手術、普及活動、情報提供を規制するものである。その結果、非合法で人工妊娠中絶を行うことになり、女児を含む女性が亡くなる数が増えた。また、同性愛の性的行為を死刑の対象とする国もある。バングラデシュの新聞社による調査によると、「レイプを防止するためにはどうすれ

ばよい？」に対する最も多い回答は「性教育を提供する (72.2%)」であった。

性に関する暴力や差別は個人レベルの被害にとどまらず、グローバルヘルスを脅かすことになる。LGBTQ+が学校で偏見を受けたり、設備環境の不備があったりすると学校に行くことが困難になり、自殺、貧困、人身売買、HIV 等の問題につながる。トランスジェンダーを理由に殺害される人が 2017 年には 8 万 7 千人もいた。

今後、包括的性教育が広がれば、個人の性や身体に関する決定が尊重され、母国での教育や宗教に基づくものや大切と思うことを互いに尊重することにつながるだろう。

3) インドネシアの性に関する教育 (津田 聡子)

現在わが国には、約 172 万人が外国人労働者として在住し、中でもイスラム教信徒 (以下、ムスリム) の労働者人口は増加の一途を辿っている。その中でも特に、インドネシアからの労働者は 2008 年の日本・インドネシア経済連携協定に基づく看護師等の受け入れや、2017 年の外国人技能実習制度によって急増している。そのため、今後日本の教育現場には、ムスリムの子どもの在籍者数が増加することが予測されている。

近年、世界各国において包括的性教育の導入が進められている。性について公に語ることがタブー視されているインドネシアの実態を探り、今後の日本における外国籍の子どもへの性教育の在り方を検討していくこととした。

インドネシアは 1 万 7 千以上の島々が広がる世界最大の群島国家であり、人口は 2 億 7 千万人超 (世界第 4 位)、パンチャシラ (多様性の中の統一) という国是の下、民族、言語、宗教ともに多様性に富んだ国である。インドネシアはキリスト教、仏教、ヒンズー教など信教の自由を認めており、多様性が重視される一方で国民の約 9 割がムスリムであり、多くの人々の生活はムスリムの慣習に基づき営まれている。インドネシアの子どもたちが学校現場で性に関して学ぶ機会は主として必修科目である宗教教育の中である。宗教教育では日常生活上のルールとして禁止事項を学ぶ機会が多く、婚前交渉や婚外交渉は姦通であることや、不特定多数の性別の人たちが集まる場所においては女性が髪や肌を隠したり、事前に性別で隔離を行ったりするなどのルールが教えられる。また、同性愛についてはイスラム教では認められていないと解釈されている

インドネシアの性に関する健康問題

- 青年 (15-19 歳) AIDS 罹患率 3.3%
- 青年 (15-19 歳) AIDS に関する知識がある
男性 10.6%, 女性 9.9%
(Global School Health Survey 2015)
- 18-20 歳の 33% の若者が性行動に活発であり、その約半数が避妊をしていない (Durex RB Indonesia, 2019)
- 女性/子どもに対する性暴力の増加
…子どもについては男子 > 女子 (KPAI 2018)
- 90% 以上の性暴力が報告されていない
…慣習的な文化: ムシャワラ (審議) (LenteraSintas Indonesia 2016)

日本の性教育とムスリムの子ども

- 各家庭の宗教観を確認する必要がある
- CSE への賛否は様々 (肯定的な家庭もある)

- 日本における性教育
なぜ必要か、意図と目的を説明する
(具体的にどのようなことを、
何を使用して教えるか)



⇒ほとんどの親が懸念していることは、性教育の方法論と内容と道徳的観点との関係

(MCB SchoolGuidance 2007)

図 3 津田先生のスライド (一部)

ことから、世界的に意識改革が広がっている LGBTQ+に関する内容を授業で取り上げることは極めて困難といえる。

都心部を中心に健康に関する意識が高まっているものの、若者の性に関する健康問題は増加傾向にある。また、健康課題に関する情報の中央データベースの整備が不十分であり、統計上の報告件数は実態を反映しきれていないという問題もある。特に、女性・子どもへの性暴力の増加、そして 90% 以上の性暴力が報告されていないという深刻な状況にある。背景には性被害にあったという事実が、その被害者の生活全般に関わるため、慣習である審議で終結させ、公に報告はしないという意識も潜む。性に関する包括的な知識やデータの欠如が性暴力に関する知識や予防を妨げ、犯罪の蔓延防止を困難にしている (図 3)。

今後の日本において、ムスリムを含めたあらゆる背景の子どもたちへの性教育を考えていく上では、子どもにも保護者にも科学的な見地から丁寧に説明することが求められ、ポジティブなレビュー結果が示されて

いる包括的性教育は客観的事実として有効であるといえる。ムスリムの保護者は、宗教上の道徳的観点から問題がないかどうかを懸念する場合が多く、欧米のいくつかの学校では学校で行われる性教育について、ムスリムの保護者が学校に定期的に相談できる機会を設けている。性の価値観は宗教によって大きく異なることを理解し、各家庭の宗教観を確認した上で、科学的根拠や事実に基づく性に関する情報を提供することが必要である。多文化共生の在り方を学校現場での性教育に置き換えれば、性への規範を一方的に押しつけるのではなく、多様な文化を理解、尊重しながら、性教育の在り方を考えていくという視点が必要である。また、宗教上の道徳的観点を尊重、理解した上で、子どもたちが今後の人生で直面するかもしれない性に関する健康リスクについて、主体的に考え、行動に責任を持つことを探求させる教育が重要である。子どもたち一人ひとりが幸福に生きるためにどうするべきかという教育を柔軟に行い、わが国の性教育においても社会的、文化的背景を踏まえ、比較・共有の視点をもって多様な子どもたちへの教育として発展させていくことが重要である。

4) 沖縄県における思春期性教育の現状と課題（桑江 喜代子）

助産師としての経験から、妊娠は喜ばしいことだけではなく、中学生・高校生の妊娠、中絶、性感染症、レイプなどつらい出来事にも出会ってきた。このような現場経験から見えてくることは「子どもたちをいかに守るか」ということである。

沖縄県は出生率が全国一であり、子だくさんの県であるが、10代の若年妊産婦の出産割合は全国の約2倍にある。一方、シングルマザーの出現率、離婚率ともに全国一であり、これらは沖縄県における子どもの貧困問題につながっていると指摘されている。沖縄県における思春期保健の課題として、①10代の人工妊娠中絶の増加、②10代の若年妊産婦の出産、③10代女子のやせ割合の高さ、④10代の喫煙率の高さ（妊娠中の喫煙）、⑤青少年の飲酒、無断外泊、深夜徘徊の高さが挙げられる。

思春期性教育とは「子どもたちに向き合うこと」である。具体的には、「子どもからの質問にどう答えているか」、「保護者自身の性に対する考えを子どもに伝えているか」、「家族が話す場を持っているか」、「保護者自身が豊かなセクシュアリティを持った生き方をし

思春期の子ども達の性的自立を支援するには

子ども達にきちんと向かい合うこと

- ・子どもの質問にどう応えていますか？
- ・親自身が日ごろから、性についての考えを子どもに伝えられていますか？
- ・家族が話す場が持っていますか？
- ・親自身が豊かなセクシュアリティを持った生き方ができていますか？

望まない妊娠・出産を回避するためには？ 妊娠してからの対応では遅い！！

- 1) 思春期・義務教育の中学までに、きちんとした避妊まで含めた性教育が必要（正確な知識を持つこと）
- 2) スムーズな子育て・スムーズな妊娠・分娩を保障するには、成熟期になってからのアプローチだけでは遅い
- 3) 思春期やせ症、性感染症、望まない妊娠や人工妊娠中絶等々について正しい知識を伝えることが必要

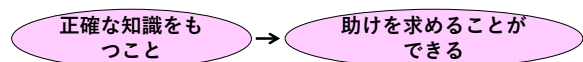


図4 桑江先生のスライド（一部）

ているか」を立ち止まって考える機会である（図4）。

一般社団法人沖縄県助産師会では「教育こそ最良のワクチン」の考えの下、未然に防ぐことを重点に置き、思春期性教育の講演活動を行っている。2020年度は小学校で28回、中学校で56回、高等学校で40回、計1万人余りを対象に行った。講演内容は身体と心の両側面を扱う。身体については①第二性徴、②月経、③避妊・緊急避妊・妊娠・出産・人工妊娠中絶、④性感染症、⑤性的トラブル、⑥その他の体調不良、⑦信頼できる大人に相談することを伝える。また、心については①性的変化に心がついていけるか、②進路・生き方などの思春期特有の悩み、③子どもから大人への過渡期、④友人関係、⑤家族関係、⑥摂食障害、⑦性同一性障害・LGBTQ+、⑧SNS・LINEによる睡眠不足・スマホ依存を伝える。思春期性教育の2つのポイントは「子どもたちが正確な知識を持つこと」、「助けを求めることができるようになる、助けを求める場所があること」である。

思春期は人としての旅立ちの時期である。自立した

大人を目指した自分探しの旅である。自分で考え、自分で決め、自分で行動することである。このような思春期に関わる大人の責務は、自由に自分探しの旅ができる環境を整えることである。固定的な枠組みに一方的に縛りつけるのではなく、柔軟な姿勢で旅立ちを見守ることである。

5) 質疑応答 (座長・シンポジスト)

(座長) 思春期性教育の講演活動への反響はどのようなものか。

(桑江) 性に関して学んだという感想はもちろん、「これからこんな人生を進んでいきたい」といった未来の自分に関する感想も多い。一年ごとに同じ子どもたちへ講演活動を行う中で「今年は違うことに気づくことができた」という感想もあり、毎年続けていくことの大切さを感じている。

(フロア) 学校以外で性のことを相談する機会としてどのようなものがあるのか。

(Alexander) 子どもの各成長段階に合った取り組みが重要である。カナダ、アメリカ、イギリスなどでは性のことを相談できるオフィスを政府が作っている。他にも地域ごとに支援団体等が活動している。

(フロア) 子どもへの性教育も大切だが、保護者への性教育はどのようなものがあるのか。

(津田) 私自身、障害のある子どもたちへの性教育に取り組んでいる。この取り組みの中で、保護者に対して「性に関することの子どもへの伝え方」を研修するが、参加者から「私自身が性のことを知らなかった」、「恥ずかしくて、子どもにどう声掛けをすればよいか」がわからなかった」といった感想がある。LGBTQ+については学校での取り組みも増えており、子どもたちの理解が高まると思う。一方で保護者世代はLGBTQ+を含め、今話題になっている性のことを学ぶ機会が少なく、この点へのアプローチも重要である。

(Alexander) 若者は知識が増えているものの、態度や振る舞いに連動しているかは疑問である。性に関して一見寛容だが、自分の身近な話になると従来の固定的価値観に固執することがある。若者が性に関することをカミングアウトできない背景には保護者にいえないことがある。

(桑江) 沖縄県では小学校や市町村でLGBTQ+当事者の話を聴く機会を作っている。また、学校の制服のスカート、ズボンを自由に選択できるようになったり、学校に多目的トイレが設置されたりしている。子

どものLGBTQ+については保護者が納得できず、受け入れが難しい。個人の価値観を尊重する社会に向かってほしい。

(フロア) 日本人は宗教的な縛りがあり、性教育が進みにくいのだろうか。

(津田) 日本は宗教よりも歴史的に純潔教育の背景があり、性教育の進みにくさがある。日本では宗教よりも個人の価値観の影響が強い。世界的には多様な性の在り方を尊重する流れなので、日本もそのような状況を目指してほしい。

(Alexander) 科学的根拠に基づけば宗教観の違いを越えて議論しやすくなる。ただ、性には多様性や個人の趣向が大きく関与するので、科学的根拠だけでは議論が深まらないかもしれない。

6) まとめ (中井 靖)

シンポジスト3名に共通するメッセージは「自分も、相手も大切にする」である。性教育は性のことを通じて「人として」という生来的な内容を考えることに移り変わっている。一方的な価値観で自分も相手も縛るのではなく、互いに歩み寄りながら考え続けることの大切さを改めて感じた。このように考えると性教育に関するテーマは多様で壮大にある。今後もシンポジウムやあらゆる形で考え続けたい。

Ⅲ. おわりに

本シンポジウムは10~20年後の未来を見越した小児保健に関する課題について職種を越えて議論する中で性教育に着目した。思いをつなぎ、広げていくための第一歩として本企画を立案した。

性教育には多様な切り口がある。今回のシンポジストは平和学・国際関係論者、インドネシアの実情を踏まえた学校保健学者、そして沖縄県の思春期性教育活動を行う助産師であり、それぞれ性教育の国際的指針である包括的性教育に立脚した内容であった。

子どもたちが性に関する行動を自己決定するためには「正しく学び、みんなで考え続ける」ことが重要である。包括的性教育は従来の性教育での内容に加え、人権や共生といった広く人間教育を包含するものであり、世界の主流となっている。未来の日本の性教育を見越し、子どもや学校だけではなく、保護者も地域も包括的性教育を学び、みんなで考え続ける社会であってほしい。